

クアルテット

をめぐる3つの話 文・安田和信



イグナーツ・シュパンツィヒ
1808年の暮れに創設したラズモフスキー四重奏団は、プロの楽団としては初めての弦楽四重奏団だったと考えられている。

紀尾井ホールは開館以来“室内楽の殿堂”として、多くの方に音楽を楽しんでいただいております。しかしひと口に“室内楽”といっても、その編成はあまりに多種多様。それらの中で特に組み合わせとしての完成度が高く、“4人の賢者の会話”と称えられてきたのが弦楽四重奏です。リレー連載6回目は、クアルテット(弦楽四重奏)をめぐる3つのお話です。

1 はじまりは楽しみとして

弦楽四重奏曲は18世紀中頃に誕生し、世紀後半に隆盛を見たジャンルで、膨大な数の作品が流布していました。ヨーゼフ・ハイドゥン(1732~1809)のように特定の貴族に仕えた作曲家がその宮廷内での使用のために作曲することもありましたが、出版される機会もまた非常に多くありました。愛好家の需要があったからです。弦楽器を趣味とする愛好家が集まって、宮廷だけでなく、裕福な市民の家庭で演奏を楽しんでいたのです。そうした空間では演奏会のように聴き手の存在は必ずしも必要なく、ただアンサンブルの喜びを味わうということも少なくなかったでしょう。作曲家の方もそうした需要を想定して、技巧的に難しすぎるパッセージをなるべく避け、愛好家たちが無理なく楽しめるように作曲するよう努めました。その一方で、4つの同族楽器によるアンサンブルは作曲家にとって自分の作曲能力を世の中に示す恰好の器としても機能し、器楽の中で弦楽四重奏曲は高級なジャンルという位置付けがなされるようになったのです。

2 作品の複雑化と聴衆の誕生

この潮流から、ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770~1827)が現れます。彼は弦楽四重奏曲を演奏技巧の点でも、内容の点でも難解なジャンルへと引き上げる決定的な役割を果たしたと言えるでしょう(特に後期作品)。彼の活躍した19世紀初頭になると、四重奏曲の出版は実際の演奏に使われるパート譜だけでなく、スコアの形で出版される場合がりました。それだけ音楽が複雑になり、全声部を一目で確認できるスコアの必要性が高まったのです。また、室内楽に焦点をあてた公開演奏会の開催もこの時期から徐々に目立つようになってきます。プロの演奏家が事前にきちんと準備した上で開催される室内楽の演奏会に、自らは演奏に加わらない聴き手が集まりました。宮廷や家庭で演奏して楽しむという目的の他に、演奏会でプロが演奏することを想定するジャンルへと変貌したというわけです。

3 特別なジャンルへの発展

いわば“弦楽四重奏曲のプロ化”の進行を考えた時、イグナーツ・シュパンツィヒ(1776~1830)というヴァイオリニスト者が1820年代にウィーンで行った室内楽演奏会が最初期の代表的な試みの一つに挙げることができそうです。彼はウィーン以外の作曲家も取り上げましたが、ベートーヴェンやフランツ・シューベルト(1797~1828)のようなご当地の優れた作曲家の作品も積極的に紹介しました。これ以降、弦楽四重奏曲が公開演奏会で初演されることが増加していった背景には、プロの演奏家による四重奏団、また室内楽演奏会の組織が次々に設立されたという事実があります(初演の年月日、場所、演奏者が記録に残るように)。例えばゲヴァントハウス四重奏団(1809年設立)、ドレスデン四重奏(1840年設立)をその代表的な例に挙げることができるとでしょう。こうした団体の活動によって、弦楽四重奏曲における“名曲”の系譜が形成され、特別な器楽ジャンルという地位を確実なものとしたのです。

クアルテットをめぐる
紀尾井ホール公演

●クアルテットの饗宴2019

6/7(金) 19:00開演

アポロン・ミュゼガート
弦楽四重奏団

シューベルト:弦楽四重奏曲第1番短調(変ロ長調) D18
ペンデレツキ:弦楽四重奏曲第3番《書かれなかった日記のページ》
シューベルト:弦楽四重奏曲第15番ト長調 Op.post.161, D887

10/31(木) 19:00開演

ドーリック弦楽四重奏団

ハイドン:弦楽四重奏曲第38番変ホ長調 Op.33-2, Hob.III:38《冗談》
ブリテン:弦楽四重奏曲第3番 Op.94
ベートーヴェン:弦楽四重奏曲第13番変ロ長調 Op.130「大フーガ付」

セット券
好評販売中!